

# パスカルの気晴らしの源泉 アウグスティヌスとモンテーニュ

宮 崎 信 嗣

## 序論 主題と目標

「個々の関心事をすべて調べなくても、気晴らし *divertissement* の名のもとに一絡げにすれば十分だ」(S713/L478<sup>1)</sup>)。パスカルによれば、地上に見出される諸々の活動は、そのおおかたが気晴らしである。余暇をついやす趣味や娯楽のみならず、週日にいそしむ学業や仕事もそうである。恋愛や戦争のような、特殊あるいは非日常的な営為さえ例外ではない。もっとも、彼の言う「気晴らし」が何を意味しているのかは、注意が必要だけれども。

この小論の主題は、『パンセ』における気晴らしの思想である。もう少し限定すれば、気晴らしの思想の発生となる。目標は主に二つある。気晴らしの思想の源泉としては、とりわけアウグスティヌスとモンテーニュの二人が認められてきた。目標の一方は、両者による気晴らしの思想への影響を確かめること。他方は、この確認にもとづいて、気晴らしの思想が生

---

1) 凡例。(1)『パンセ』の断章の指示に際しては、Sellier 版と Lafuma 版の断章番号を併記する。必要に応じて Sellier 版の断章番号に § の記号とともに段落番号を付記する。(2)『パンセ』の底本としては *Pensées, édition établie d'après l'« ordre » pascalien par Philippe Sellier, Pocket, 2003* を用いる。(3) 同一箇所からの引用が続く場合には指示を省略する。(4) 訳文は筆者のものである。原文における [ ]、訳文における [ ] は筆者による。[ ] と [ ] は補足、[ : ] と [ : ] は言い換え、[...] と [...] は省略を表す。「 」は引用、〈 〉は区切りなどのために使用する。

まれたいきさつについて、一つの仮説を提出することである。

### 第一節 気晴らしという事象の二つの側面 空騒ぎと気慰み

アウグスティヌスとモンテーニュの確認に着手するまえに、二つの課題に取り組まねばならない。一つ目は、パスカルの言う気晴らしという事象がどのようなものかを明らかにすること。二つ目は、何をもちて〈気晴らしの思想の発生〉と呼ぶのかを設定すること。ここでは主に S168/L136 を拠り所とする。これは気晴らしというテーマについて論じた最も長く最も推敲された断章であり、導入部 (§2-§5) は気晴らしの思想の基礎について一から理解できるように意図されている。その他の記述も参照しながら、この部分を読み進めよう。

#### 〔§1〕 気晴らし。

〔§2〕 人々の様々な空騒ぎ *agitations*、宮廷や戦争において身をさらす諸々の危険や苦勞、そこから生じるあれほど多くの不和や激情や大胆にしてしばしば悪しき計画、その他のものを幾度か考察したとき、私はしばしばこう述べたものだった。「人々の災難のすべてはただ一つのことによって由来する。それは、どこかの部屋のなかに安息 *repos* して留まるすべを知らないということである [……]」。

気晴らしの論述は、「空騒ぎ<sup>2)</sup>」をめぐる考察の回顧から始まる。「人々の災難のすべて」は空騒ぎに由来し、空騒ぎは「安息」の不可能性に由来

---

2) 空騒ぎ *agitation* という言葉は S168/L136 では §2, §8 において見られる。類義語は *tracas* (§5)、*bruit* (§6)、*remuement*、*tumulte* (§8) など。他の断章における *agitation* の用例としては、気晴らしに関わる S34/L415 の小見出しと、気晴らしとは無関係な S164§17/L131 のものしか見られない。気晴らしの考察における *agitation* はパスカルの術語と見なしてよい。なお、『パンセ』における語句の用例は、次のコンコルダンスで確認できる。Hugh M. Davidson and Pierre H. Dubé, *A concordance to Pascal's Pensées*, Ithaca, Mich., Cornell University Press, 1975.

する。ただし、もっぱら空騒ぎに興じている人々であっても、安息を求めているわけではない。彼らは「空騒ぎをつうじて安息を目指」（§8）しているのだ。

空騒ぎという言葉の意味、空騒ぎの定義はどのようなものか。空騒ぎはある種の「事物の追求<sup>3)</sup>」（S637/L773）である。狩りをする者は「兎」（S168§7/L136）を追いかける。しかし市場で「買っておくことは望みもしない」。賭けをする者は「金銭」（§15）を求める。しかし「賭けをしない代わりに貰えるとしても、そんなことは望みもしない」。なぜ手っ取り早く手に入れようとししないのか。それらの事物に「実際に幸福があるわけではない」（§5）からだ。空騒ぎで追求される事物は無益であり、空しい。空騒ぎの定義とは、少なくともその一部においては、次のようなものである。〈空しい事物を追求する活動〉。

人々は空騒ぎ、空しい事物の追求に耽っている。常識外れではあっても、思想史や宗教史においてはありふれた意見だろう。これに対して§3からは、パスカル独自の意見が述べられる。

〔§3〕しかしより踏みこんで考えてみて、私たちの災難すべての原因を見出したうえて、その原因の理由を発見しようと望んだとき、私は見出した。まさしく現象を生み出している理由があるのだ。この理由とは、弱く死すべきであるという私たちの境遇、深く考える *penser* ならば慰める *consoler* すべきはないほどに悲惨な *misérable* 私たちの境遇が、本性において不運であることに存する。

---

3) 「私たちは決して事物を追求しない、事物の追求 *recherche des choses* を追求するのである」。気晴らしの考察においては、追求する *chercher/rechercher* ことの対象として、三種類のものが問題になっている。事物、空騒ぎ／気晴らし、安息である。S168/L136 から例を挙げれば、「彼らがあればほど熱心に追求しているもの〔：事物〕は、彼らを満足させないだろう」（§8）。「彼らは真剣に安息を追求していると信じているが、実際には空騒ぎしか追求していない」。「気晴らしと関心事を外部に追求するように仕向ける」。

空騒ぎと安息不可能性は、人間の「悲惨」に由来すると言うのだ。この因果関係を説明するために、§4 でパスカルは一つの思考実験に訴える。そのうちで空騒ぎには新しい名前が与えられる。それが気晴らしである。

〔§4〕王位こそは世間で最もすばらしい地位である。しかしながら、〔……〕もしも王が気晴らしを欠いており、もしも自分が何であるのかを眺め反省させられるならば、〔……〕王は必然的に、起こるかもしれない諸々の反乱を見て、そして避けることのできない死と諸々の病を最後には見て、脅かされる羽目になるだろう。このようなわけで、人が気晴らしと呼ぶもの *ce qu'on appelle divertissement* がなければ、王といえども不幸なのである〔……〕。

王という最も恵まれた人間ですら、偶然的、必然的な悲惨の数々に取り巻かれている。死の運命ひとつ取ってみても、彼の境遇は悲惨である。それでもし何もしないでじっとしていれば、王はこれらの悲惨のことを考えてしまい、苦悩<sup>4)</sup>に苛まれて、ひどく不幸になるだろう。だから王は空騒ぎ、気晴らしに耽らざるをえないのだ。王以外の人間であれば、なおさらである。

「人が気晴らしと呼ぶもの」。この表現によってパスカルは、「気晴らし」を独自の意味で用いているのを伝えようとしている。「人」とはこの場合、パスカル自身を指すのだろう<sup>5)</sup>。そして、言葉を新しい意味で用いるならば、その定義が求められる。パスカルは直ちに「気晴らし」の意味を説明する。

---

4) この苦悩をパスカルは *ennui* と呼ぶ。「障害が乗り越えられてしまうと、休息はその産物である苦悩によって耐えがたくなる」 (§9)。気晴らしの考察における *ennui* がどのような情念であるのかは、博士論文「パスカルにおける気晴らしと探求」三章で主題とした。

5) 「〔人が気晴らしと呼ぶもの〕という言い回しにおいて、人は私に等しい」 (*Discours sur la religion et sur quelques autres sujets qui ont été trouvés après sa mort parmi ses papiers, restitués et publiés par Emmanuel Martineau, Fayard, Armand Colin, 1992, p. 254*)。あるいは、*divertissement* という言葉の出自であるモンテーニュを指すのかもしれない。

〔§5〕ここからして賭けや女性との交際、戦争、顕職があれほど追求される。〔……〕人が追求しているのは、〔……〕私たちの境遇を考えることから私たちの心に向け変え、私たちの心を逸らす騒動 *le tracas qui nous détourne d'y penser et nous divertit* なのである。

「私たちの境遇を考えることから〔……〕私たちの心を逸らす騒動」。これが〈気晴らしという言葉〉の定義だろう。もしそうでなくても、パスカルがここに気晴らしという言葉で指示される、〈気晴らしという事象〉の本質を見ていたことは間違いない。気晴らしという事象は、その主要な性質からすれば、〈悲惨を考えることから心を逸らす空騒ぎ〉なのである。他方では、これが気晴らしの本質である以上、〈気晴らしの思想の発生〉した時とは、次のように設定できる。〈人々の関心事のすべては、悲惨を考えることから心を逸らす空騒ぎである〉ということに、パスカルが思い至ったその時である。

以上で二つの課題は解決された。けれどももう少し『パンセ』に留まって、いくらかのことを確かめておこう。

気晴らしと安息の関係について。双方は異なる原理によって追求される。二つの「隠れた本能」 (§8) である。〈気晴らし本能〉の方は、人々が「自分の絶えざる悲惨を感じ取ることに由来する」。〈安息本能〉の方は、「私たちの最初の〔：原罪による墮落以前の〕本性が偉大であったことの名残である。この本能は人々に対して、幸福は実際には安息のうちにしかなく、騒ぎのうちにはないことを知らせる」。これらの「対立する二つの本能」が競合することで、人々は「空騒ぎをつうじて安息を目指」すことになる。

「貪愛 *cupidité*<sup>6)</sup>」について。この神学的表現は、被造物への欲望を意味する<sup>7)</sup>。神学的見地からすれば、気晴らしにおいて追求される事物とは被

---

6) 「人々は、もしもこの公職に就いたならば、そのあとには快く休息するだろうに、などと想像している。貪愛の飽くことを知らない本性に気付いていないのである」。

7) 貪愛という言葉は他には S508/L615 と S738/L502 においてしか使用されてお

造物であり、この事物の追求原理は貪愛なのである。気晴らしに際して人々は、無益な事物を有益であると「想像することで自分自身を騙す。それは〔……〕自分で作り上げておいた対象に向かって欲望〔……〕を掻き立てるためである」 (§15)。つまり気晴らし本能は、想像力を働かせて、貪愛を煽り立てるわけだ。そうしてはじめて、人々は無益な事物の追求に「熱中する」ことができる。気晴らしができるわけである。

考えること、つまり思考について。すでに見たように、気晴らし *divertissement* は悲惨を考えることから〈心を逸らす *divertir*〉ものである<sup>8)</sup>。他方では、気晴らしは気晴らしについての思考で〈心を満たす〉ものでもある。「誰かを幸福にするためには、家庭の悲惨を見ることから彼の心を逸らして、上手に踊るといふ案じ事で彼の思考のすべてを満たせば *remplir toute sa pensée* よい。けれども〔……〕楽曲の拍子に足取りを合わせようとするところで王の魂を満たす *occuper son âme à penser* ならば、王の喜びを損ないはしないか」 (S169/L137)。「この偉大な魂を満たし *occuper*、彼の精神から他の思考のすべてを取り除くのに相応しい案じ事がそれなのだ」 (S453§6/L522)。またここからして、気晴らしはときに〈関心事 *occupation*〉と言い換えられる<sup>9)</sup>。これは〈心をその思考で満たす活動〉というほどの意味だろう。

気晴らしの二つの側面について。あの気晴らしの定義らしきものと、そこに至るまでの文脈から、気晴らしという事象には主要な二つの側面があることが解る。気晴らしは一方では〈空騒ぎ〉、空しい事物を追求する活動である。他方では悲惨を考えることから心を逸して「慰める」 (S168§3/

---

らず、どちらの断章においても慈愛 *charité* と対置させられている。

- 8) 「王は王の心を逸らすこと、王が自分を考えるのを妨げることだけを考える人々に囲まれている」 (§6)。「この思考 *pensée* から彼の心を逸らす必要はあるだろうか」 (S169/L137)。
- 9) 「自分を考えることから人々の心に向け変える、荒々しく激しい関心事」 (S168§8/L136)。「気晴らしと関心事を追求する」。「個々の関心事をすべて調べなくても、気晴らしの名のもとに一絡げにすれば十分だ」 (S713/L478)。

L136) 活動、いわば〈気慰み〉である。

気晴らしの思想にはアウグスティヌスとモンテーニュという二つの源泉がある。気晴らしには空騒ぎと気慰みという二つの側面がある。続く二つの節では、それぞれの源泉から気晴らしの思想へと、何が流入したのかを確かめる。

## 第二節 モンテーニュ

### (A) 気を逸らすことと気慰み

影響の比較的明瞭なモンテーニュから始めよう。パスカルは『エッセー<sup>10)</sup>』を愛読していた。諸家によって気晴らしの思想の源泉と見なされてきたのは、その3巻4章「気を逸らすことについて De la diversion」である<sup>11)</sup>。

気を逸らすこと diversion とは何を意味しているのか。モンテーニュは具体例を豊富に挙げている。そのうち二つを標本にしよう。一つ目はモンテーニュの体験談である。あるとき彼は「気を紛らわすために強い diversion を必要としたので、意図し努めて恋をあさった〔……〕。恋は、友を失ったことによる不幸から、私を解放した」(p. 835)。この diversion はいわゆる〈気分転換〉であろう。二つ目の例は、オウィディウスの『変身物語』(10巻680以下)に取材している。美麗と駿足をほこるアタランテに対して、ヒッポメネスが駆け比べを挑む。勝てば娘を娶ることができるが、負ければ命はない。競争が始まる。アタランテに追い抜かれそうになるたびに、ヒッポメネスは女神から授かった黄金の林檎を地に転がす。気を取られた娘は、林檎を拾い上げようとする。三つの林檎が使い果たさ

10) 『エッセー』の底本としては次の版を用いる。Les Essais de Michel de Montaigne, édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux, par Pierre Villey, réimprimée sous la direction et avec une préface de V. L. Saulnier, Paris, PUF, 1965.

11) Cf. Jean Mesnard, *La culture du XVII<sup>e</sup> siècle, enquêtes et synthèses*, Paris, PUF, 1992, « De la « diversion » au « divertissement » », pp. 67-73. 「パスカルはモンテーニュによって導かれた。創造の運動は「気を逸らすことについて」の章を読むことで始まった」(p. 68)。

れる。ついには、「このように道を外れさせること *fourvoyement* と *divertissement* によって、競争の勝利は彼のものになった」(p. 832)。この「*divertissement*」は *diversion* の類義語だろうが、〈道から逸らすこと〉というほどの意味だろう。結局のところ、*diversion* とは一般化すれば〈逸らすこと〉、とりわけ〈気を逸らすこと〉であるらしい。

「気を逸らすことについて」には、気晴らしの思想に転用可能な素材として、どのようなものが見分けられるか。一度だけ使用されている *divertissement* という言葉。心を逸らして苦悩から逃れるという発想：「なんらか辛い思いが私を捕える。その思いを服従させるよりも、取り替える方が手っ取り早い」(pp. 835-836)。人々が自他の死に面して心を逸らすこと：「彼らは死から自らの注意を向け変える」(p. 833)、「私たちが考えるのはいつでも他の何かである」(p. 834)。心を逸らすことと考えることの結び付き：「私は別の仕事と考え *pensées* の群れへと逃れ込む」(p. 836)。そして、心を逸らすことによる慰め。この章はこんな風に始まる。「私はかつて、本当に悲しんでいる一人の婦人を慰める *consoler* ように頼まれた」(p. 830)。

それでは、「気を逸らすことについて」の章から気晴らしの思想へと流入したのは、要するに何なのか。〈悲惨を考えることから心を逸して慰める活動〉という発想、〈気慰み〉の発想である。

## (B) 慰め、癒やし、薬

腑に落ちないところがある。モンテーニュは言う。「些細なことが私たちの心を逸らし私たちの心に向け変える *nous divertit et détourne*、実際に些細なことが私たちを捉えるのである」(p. 836)。パスカルは換骨奪胎する。「些細なことが私たちを慰める *nous console*、なぜならば些細なことが私たちを悲しませるからである」(S77/L43)。気晴らしの思想にとって最重要の *divertir et détourner* という動詞を、わざわざ *consoler* に置き換える。それほどまでにパスカルは、〈心を逸らすことによる慰め〉に、

興味を引かれていたらしい。しかし、なぜ。

パスカルがこの種の慰めを、もう一つの本当の慰めと対置していたからだとすれば、つじつまが合う。それは、神とキリストによる慰めである。人間には悲惨を慰めることはできない：「神の知恵は言う、人間よ、人間から真理も慰め consolation も期待してはならない」（S182§8/L149）。罪と悲惨のうちにいる人間にとって、本当の慰め主は、キリストである：「神を探求する者たちは、慰められるがよい。私は彼らに喜ばしい知らせを告げる。彼らには一人の解放者がいる」（S300/L269）。そして決定的な証言。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、キリスト教徒の神は、愛と慰めの神である」（S690§26/L449）。

これに対して、〈心を逸らすことによる慰め〉など、紛い物にすぎない。なぜならば、悲惨から心を逸したところで、悲惨から癒されるわけではないのだから。このことをモンテーニュは十分にわきまえていた。あの悲しみのうちにいた婦人は、モンテーニュの処方した〈気を逸らすこと〉によって、いつとき心の平静を取り戻した。しかし、この治療談の結びは後味の悪いものである。「私からこの同じ役目を引き継いだ者たちは、彼女のうちに少しも回復したところを見出さなかった。実際に、私は病根に斧を入れたわけではなかったのだ」（p. 831）。

〈心を逸して慰める活動〉である気晴らしもまた、偽の薬にすぎない。それは悲惨を癒さず、忘れさせる。悲惨の治療薬を創れなかったからこそ、人間は、この心の鎮痛剤を発明したのだ。「人間たちは、死と悲惨と無知を癒すこと *guérir* ができなかったので、幸福になるために、それを考えないことを思い付いた」（S166/L133）。だが、偽の薬にとどまるならば、人間にとってははまだましであろうに。というのも、実のところ気晴らしは、破滅をもたらす毒薬なのだから。

私たちの諸々の悲惨を慰める唯一のものは気晴らしである。しかしながら、気晴らしは諸々の悲惨のなかで最大の悲惨なのである。〔……〕

気晴らしがなければ私たちは苦悩に陥ることだろうし、この苦悩は私たちを駆り立てて、苦悩から逃れるためのより確固とした方法を探求させることだろう。けれども気晴らしは私たちを誑かし、知らず知らず死に至らせるのである。(S33/L414)

気晴らしという偽の薬がなければ、人間は、悲惨を癒やす本当の薬、神<sup>12)</sup>を探求することだろうに。偽りの慰め主、破滅への導き手。気晴らしは、パスカルにとっては、神の対立者なのである。

### 第三節 アウグスティヌス

#### (A) 『告白』と空騒ぎ

人間学の師モンテーニュを離れて、神学の師アウグスティヌスに移ろう。気晴らしの思想との類縁関係においてことさらに名指しされてきた著作は『告白』である<sup>13)</sup>。パスカルは二種類のテキストを読み比べて、双方から着想していたことが判明している。一方はラテン語原文。他方はポール・ロワイヤルの隠士であった、アルノー＝ダンディイによる仏訳（初版1649年<sup>14)</sup>）。

---

12) 「受肉は、必要とされた薬 *remède* の大きさによって、人間の悲惨の大きさを、人間に示している」(S384/L352)。

13) アウグスティヌスと『告白』からの影響を強調しているのは Philippe Sellier である。Cf. *Port-Royal et la littérature, I, Pascal*, Paris, Honoré Champion, 1999, « *Des Confessions aux Pensées* », pp. 195-222. 気晴らしは pp. 203-205 で論じられている。「パスカルの「気晴らし」の概念はさまざまな影響に由来する。けれども、そのうちの二つは明瞭に認められてきた。モンテーニュの『エッセー』3巻4章「気を逸らすことについて」。アウグスティヌスの有名な対句 *aversio (a deo)/conversio (ad creaturas)* [……]。より正確には、パスカルは『告白』の、思考を神から向け変える「好奇心」を批判するための章に、心を動かされたのである」(p. 203)。本節では、Sellier によって解明されていることがらは、その仕事を参照し、論述は簡潔にする。

14) 上掲書 pp. 200-210 では、明確な影響に限っても、20 弱の『パンセ』の記述が挙げられている。『告白』の底本としては次の羅仏対訳版を用いる。 *Les Confessions de S. Augustin*, traduites en français par monsieur Arnauld

気晴らしに際して人々は、「空騒ぎをつうじて安息 repos を目指」(S168§8/L136) なのだ。安息については、『告白』の影響が大きい<sup>15)</sup>。なかでもパスカルの印象に残ったのは、やはり序章のあのくだりである。「あなたは私たちをあなたに向けてお造りになりました。あなたのうちに安らぐ requiescat までは、私たちの心は安らぎのない inquietum ままなのです」(1巻1章 Au)。ここからして隣り合う二つの断章が枝分かれした。「もし人間が神に向けて造られていないならば、なぜ神のうちでのみ幸福なのか」(S18/L399)。「人間はみずからの真の居場所を、いたるところで安らぐことなく avec inquiétude 探している」(S19/L400)。

空騒ぎ agitation の方はどうだろうか。アルノー＝ダンディイ訳は意識あるいは敷衍が多い。先のアウグスティヌスの文章はこう解釈されている。「あなたは私たちをあなたに向けてお造りになりました。そして、あなたのうちに安息 repos を見出すまでは、私たちの魂はいつでも困惑と不安によって動揺したままなのです notre cœur est toujours agité de trouble et d'inquiétude」(1巻1章 Ar)。repos と agité が対比されている。trouble は S168/L136 の初稿では気晴らしの別名だった<sup>16)</sup>。『告白』のこの冒頭こそ、〈空騒ぎ agitation〉という言葉と発想にとって、最重要の源だろう。アウグスティヌスにおける〈心の動揺〉が、パスカルにおいてはある種の活動、〈心身の動揺〉になったのだ。

---

d'Andilly, Paris, Pierre le Petit, 1667. 仏訳については、次の版の方が読みやすい。Saint Augustin, *Confessions*, édition présentée par Philippe Sellier, traduction d'Arnauld d'Andilly établie par Odette Barenne, Paris, Gallimard, 1993. 引用に際しては、ラテン語原文を Au、仏訳を Ar で示す。

15) この段落の内容については、詳しくは Sellier, *op. cit.*, 1999, pp. 200-202 を見よ。「パスカルはいつでも真贋の「安息」を省察しているが、これは『告白』によるところが多い」(p. 202)。

16) 初稿は渥野正満によって復元されている。Cf. Masamitsu Horino, « Les trois écrits que la « plurilecture » a permis de reconstituer à partir du manuscrit de *Divertissement* », in *Courrier du Centre international Blaise Pascal*, no. 36, 2014, pp. 13-23. 「人々は、自分の境遇をおのずから感じ取っているから、何よりも休息 repos を避けるし、何としてでも騒動 trouble を追求する」(p. 18)。

## (B) 背向きと気晴らし

『告白』に限らず、パスカルがアウグスティヌスの著作一般から吸収してきた素材もある。二つを挙げるが、後者を詳しく論じよう。

第一に、貪愛 *cupiditas* あるいは邪欲 *concupiscentia*<sup>17)</sup>。気晴らしは〈空騒ぎ〉、〈空しい事物を追求する活動〉である。それに熱中するためには、被造物への欲望である貪愛を掻き立てる必要があるのだった。

第二に、〈背向き *aversio* と面向き *conversio*〉という対概念。人間は、あるいは神に背向いて被造物に面向き、あるいは被造物に背向いて神に面向く<sup>18)</sup>。

気晴らしの思想に対してより直接的に影響したのは、〈背向き〉の方だ。『告白』の確認を再開しよう<sup>19)</sup>。背向きと気晴らしが接近しているのは、邪欲の一形態、好奇心 *curiositas* を論じた 10 卷 35 章である。「円形競技場で犬が兎を追いかけるとしても、もはや見物などしません。しかし実際、田舎において通りがかりにそんな狩りが行われていたら、何か重大な〔神に関わる〕思考 *cogitatione* から私を背向かせて *avertit*、そちらの方へと面向かせる *convertit* かもしれません」(Au)。「犬」と「兎」は S168§13/

---

17) 貪愛については、Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, Paris, Albin Michel, 1995, pp. 140-144 を参照。「アウグスティヌスとパスカルは〔……〕神への愛、そして人間への神の心とともにある愛を慈愛と呼び、自分のための被造物への過度の愛を貪愛と呼ぶ」(p. 140)。また「貪愛は「我意 *volonté propre*」、自愛心 *amour propre*」、とりわけ「邪欲 *concupiscentia*」と呼ばれる」(p. 141)。

18) Cf. *ibid.*, pp. 163-167, « *aversio, conversio, divertissement* ». 〈面向き〉と〈背向き〉は、いくらか姿を変えつつも、それ自体で『パンセ』に根付いている。面向き *conversio* は、言うまでもなく、回心 *conversion* として。背向き *aversio* は、気晴らしと相似した表現をまとっている。「神を考え *penser* ようとすると、何か私たちが心に向け変えて *nous détourne*、他のもの考えるように誘惑しないか」(S14/L395)。「何か」とは邪欲であり、「他のもの」とは被造物である。「人間の唯一の敵は、神から〔……〕心に向け変える邪欲である」(S300§5/L300)。「被造物は、義人の心を神から向け変えるならば、義人の敵であろう」(S738§15/L502)。

19) この段落の以下の内容については、詳しくは Sellier, *op. cit.*, 1999, pp. 203-204 を見よ。

L136 の原稿に登場する<sup>20)</sup>。「背向かせて」のあたりは、仏訳では « *divertira* [...] de quelque grande pensée » である。

アウグスティヌスの〈背向き *aversio*〉の理論は、パスカルの〈気晴らし *divertissement*〉の思想にとって、いうなれば原型なのである<sup>21)</sup>。しかも、モンテーニュの〈気を逸らすこと *diversion*〉の考察と、同等の資格においてである。因果関係について言えば、テキスト間の類似から明らかのように、〈気を逸らすこと〉と〈背向き〉はともに〈気晴らし〉の原因である。類似関係について言えば、〈気晴らし〉という事象には、〈貪愛によって被造物を追求する〉という側面と、〈悲惨を考えることから心を逸らして慰める〉という側面がある。〈気を逸らすこと〉は、ときにこのように〈慰める〉ものとなる。〈背向き〉は、〈貪愛によって被造物を追求する〉ことであると同時に、〈神を考えることから心を逸らされている状態〉である。名称について付け加えることもできる。*divertissement*、*diversion*、*aversio* は同根であり、ラテン語の *verto*（回す、向ける）を語源とする。けれども、気晴らしの原型と呼べるのは、これら二つだけだろうか。

### (C) 分散と気晴らし

『告白』には、〈背向きと面向き〉のほかにも、気晴らしの思想との関連を指摘されている理論がある。〈分散 *distentio*/*dispersio* と集中 *intentio*〉である<sup>22)</sup>。この理論と気晴らしの思想との関係をめぐって、その深度を測

---

20) 「一匹の犬、一つの球、一匹の兎のような、きわめて些細なものですら、彼の心を逸らすには十分なのである」(原稿 217 頁)。

21) 「*aversio* はつきつめれば人間の活動のすべてを包含している。あらゆる快楽の追求、傲慢な心の充足、些細なことがらへの好奇心、これらすべてはただ一つの源に発する。*aversio*、気晴らしである」(*ibid.*, p. 165)。Sellier によれば、*aversio* はパスカルによって「非宗教化 *laïcisation*」(p. 166) を施されて、気晴らしになった。

22) 塩川徹也『発見術としての学問 モンテーニュ、デカルト、パスカル』岩波書店、2010 年「第五章 ひとは今を生きることができるか——パスカルの時間論——」153 頁～183 頁、特に 173 頁～175 頁を参照。塩川は『告白』11 巻 29 章を祖上に載せている。「[分散] は、アルノー＝ダンディイ訳によれば、「放

ってみよう。分散にせよ集中にせよ、『告白』の所々でぼつぼつと露出しているだけなので、そのような箇所を参照することになる。

まずは理論の概観から。分散は〈神からの背向き〉、つまりは〈被造物への面向き〉の別表現だ。被造物は数に限りがないから、諸々の被造物に心が向けられるとき、心は無数に分散する。集中の方は〈神への面向き〉に対応する。神は一だから、もっぱら神に心が向けられるとき、心は神に集中していることになる。〈一と多〉がこの理論の目印になる。「あなたは私を分散 *dispersione* から集めてくださいました。一なるあなた *uno te* から背向いて多くのもの *multa* のうちへ空しくなっていたとき、その分散において私はばらばらに切り裂かれていたのです<sup>23)</sup>」(2巻1章 Au)。被造物は、外的なもの、可視的なもの、時間的なものとも見なされる。「外部に *forinsecus* 喜びを求める人々は、目に見えて時間的なものども *ea quae videntur et temporalia sunt* のうちへと空しくなり、散らされます」(9巻4章 Au)。

ついで気晴らしの思想との類似関係について。二つの章において、分散と思考が結び付けられている。一つ目は、好奇心を主題にしたあの10巻35章。被造物は「何か重大な〔:神に関わる〕思考から私を背向かせ」(Au)るのであった。この文脈でアウグスティヌスは話を続ける。なるほど被造物に目を奪われるたびに、やがては自分は創造主である神を賛美する。けれども「はじめから賛美に集中して *intentus* いるわけではありません」(Au)。話題は賛美から祈りへ転じる。

私たちの心がこのようなものの器となり、大量の空しいもの *vanitatis*

---

心」 「注意散漫」であり、さらには「気晴らし」と解することさえできる」(p. 173)。分散と集中については、山田晶訳『世界の名著 14 アウグスティヌス 告白』中央公論社、1968年、11巻23章から31章までの訳注を参照。

23) 仏訳によれば、この分散の原因は「悪徳と諸々の情念 *le vice et les passions*」(Ar)、つまり邪欲である。「多くのもの」(Au)とは「多数の被造物 *la multiplicité des créatures*」(Ar)である。

パスカルの気晴らしの源泉 アウグスティヌスとモンテーニュ（宮崎）  
の群れ<sup>24)</sup>を運ぶとき、それゆえ私たちの祈りはしばしば遮られ乱されます。〔……〕どこからかくだらな思考たち cogitationibus が押し入ってきて、これほど重大なことがら〔：祈り〕を中断させるのです。（Au）

二つ目は、時間論の締め括り、11 卷 29 章。この短い章のテーマは、過去、現在、未来という時間への分散と、永遠なる神への集中である。

私は順序もわからないさまざまな時間のうちで分裂してしまっています。あなたの愛の火によって清められ溶かされて、あなたのうちに集合するまでは、雑多な騒々しいことがらによって、魂の内なるはらわたである諸々の思考 cogitationes は引き裂かれています。（Au）

どちらの章においても、思考が心を満たすものと見なされている。〈分散〉においては、〈被造物についての思考で心が満たされる〉のだ。これに対して〈気晴らし〉においては、〈気晴らしについての思考で心が満たされる〉のだった。そして気晴らしは被造物の追求だから、〈気晴らしについての思考〉には、〈被造物についての思考〉が含まれる<sup>25)</sup>。〈分散〉と〈気晴らし〉の類似関係は一目瞭然である。

残るは気晴らしの思想との因果関係である。一つ、パスカルの知り合いによる有力な証言がある。『パンセ』は遺稿集である。最初の版、いわゆるポール・ロワイヤル版は、親族や近い神学者によって編纂された。気

---

24) 「大量の空しいものの群れ」は、仏訳では「無数の空しい思考 une infinité de vaines pensées」。

25) ここからして S171/L139 の孤立した一文が理解される。「人間の心はなんと虚ろで汚物に満ちていることか」「汚物に満ちている」、つまり被造物の思考で満たされている。「虚ろ」である、つまり被造物は空しく、その思考も空しいから、心は満たされない。

晴らしに関わる断章は 26 章「人間の悲惨」にまとめられている<sup>26)</sup>。そこには編者によるこのような加筆がある。「このこと〔：人間の空虚と悲惨〕が魂に強いて外部に散らばる *se répandre au-dehors* ようにさせるのであり、諸々の外的な事物に打ち込む〔……〕ようにさせるのである<sup>27)</sup>」。この「散らばる *se répandre*」は、『告白』アルノー＝ダンディイ訳では、分散を表現するための用語なのである<sup>28)</sup>。こうなれば、パスカル自身の記述のどこかに、分散の理論の痕跡は残されていないものか。それは、S445/L889 の標題に見分けられる。

#### パンセ *Pensées*。

私はすべてのもののうちに安息を求めた *In omnibus requiem quaesivi*。かりに私たちの境遇が真に幸運なものであれば、幸福になるために、それを考える *penser* ことから私たちの心を逸らす *divertir* 必要はないだろうに。

2 行目のラテン語の出典は、ウルガタ聖書「シラ書」の、「私はこれらすべてのもののうちに安息を求めた *in his omnibus requiem quaesivi*」とされる<sup>29)</sup>。聖句の「私」は〈神の知恵〉であり、「これらすべてのもの」と

---

26) 次の拙訳を参照。『紀要 哲学 第 62 号』中央大学文学部、2020 年「ポール・ロワイヤル版『パンセ』第 26 章「人間の悲惨」訳解——パスカルの気晴らしの理解にむけて——」67 頁～83 頁。

27) *Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets, l'édition de Port-Royal (1670) et ses compléments (1678-1776)*, présentée par Georges Couton et Jean Jehasse, Universités de la région Rhone-Alpes, 1971, p. 313. ポール・ロワイヤル版そのものでは 199 頁。

28) 例えば 2 巻 1 章 « *je me suis répandu dans la multiplicité des créatures* »。9 巻 4 章 « *ceux qui veulent chercher hors d'eux-mêmes leurs contentements et leurs délices, se dissipent et se répandent dans la recherche des choses visibles et temporelles* »。10 巻 29 章 « *C'est la continence qui nous ramène à cette unité suprême dont nous nous étions éloignés pour nous répandre dans la multiplicité des créatures* »。

29) 24 章 11 節。新共同訳では 7 節。

は、知恵の遍歴した空や海、国々のことである。しかし、S445/L889の「私」とは、誰か一人の人間なのだろう。「すべてのもののうちに安息を求めた」とは、〈あらゆる気晴らしをつうじて安息を目指した〉ということだ。表題の「*Pensées*」とは、そのような人間の心を満たす〈あらゆる気晴らしの思考〉のことである。しかし、どうしてわざわざこのような〈複数形のパンセ〉を標題にせねばならなかったのか。

分散の理論を思い出してみよう。心が多数の被造物に向かうとき、心には「くだらない思考たちが押し入ってきて」（10巻35章 Au）、「諸々の思考は引き裂かれている」（11巻29章 Au）のだった。分散においては、心は被造物についての多数の思考へと分散する、とも言えるのだ。標題の「*Pensées*」とは、このような〈心の多数の思考への分散〉という発想を、気晴らしへと適用した結果だろう。あらゆる気晴らしをつうじて安息を目指すとき、心は気晴らしについての多数の思考へと分散する、ということだ。しかし「魂の安息のすべては神のもとにある」（S699/L460）。安息が訪れるのは、心が神についての一つの思考へと集中したときだけである<sup>30)</sup>。

アウグスティヌスの分散と集中の理論は、パスカルの気晴らしの思想に酷似しているのみならず、影響もしている。分散の理論もまた、気晴らしの思想の原型なのである。

## 結論 気晴らしの思想の発生

モンテーニュとアウグスティヌス、両者による気晴らしの思想への影響

---

30) パスカルの「シラ書」を想起させたのは、『告白』10巻40章のこのあたりかもしれない。「私は、これらすべてのもの *in his omnibus* のうちに、魂の安全の場所 *tutum locum animae* を見出しません。あなたのうちだけは別です。あなたによってこそ、散らばった私の持ち物は集められます」（Au）。「これらすべてのもの」は諸々の被造物と自分の内面を指す。他方で、この章は「*hic esse valeo nec volo, illic volo nec valeo, miser utrobique*」という言い回しで閉じられる。こちらは、しばしばパスカルにおける悲惨の定義と見なされる、「*c'est être malheureux que de vouloir et ne pouvoir*」（S110/L75）の出所ではないか。

を確かめてきた。要点を回顧しておこう。パスカルの言う〈気晴らし divertissement〉という事象には、主要な二つの側面がある。一方は〈空騒ぎ agitation〉、〈空しい事物を追求する活動〉。他方はいわば〈気慰み〉、〈悲惨を考えることから心を逸して慰める活動〉である。〈気慰み〉はモンテーニュに由来する。〈空騒ぎ〉は安息とともに、アウグスティヌスに由来している。また気晴らしの思想には、少なくとも三つの原型がある。モンテーニュの〈気を逸らすこと diversion〉、アウグスティヌスの〈背向き aversio〉と〈分散 distentio/dispersio〉である。

おしまいに、気晴らしの思想がどのように発生したのかを推し量ってみよう。気晴らしの思想は、パスカルが次のように思い至ったその時、発生したのだった。〈人々の関心事のすべては、悲惨を考えることから心を逸らす空騒ぎである〉。要するに、〈人々の関心事のすべては、気慰みであると同時に空騒ぎである<sup>31)</sup>〉。

二度の着想があったはずだ。〈関心事のすべては気慰みである〉という着想と、〈関心事のすべては空騒ぎである〉という着想。どちらがより先なるものだろうか。S168/L136の導入部で、パスカルはこんな風に記述していた。〈私ははじめ、空騒ぎと安息について考察していた〉 (§2)。〈あとになって、空騒ぎの目的は、悲惨を考えることから心を逸して慰めることにあると、発見した〉 (§3-§5)。この記述は、パスカルの来し方を反映しているだろうか。肯定する材料がいくつもある。パスカルの来歴として齟齬がないこと。架空の来歴を〈私〉に語らせる必要性がないこと。そして何よりも、〈はじめに空騒ぎ、ついで気慰み〉という着想の順番が、パスカル自身によって、一般的と見なされていること。「諸々の意見は、人が光を得るにつれて、賛成から反対へと移り変わってゆく」(S124/L90)。

---

31) この発生には、術語としての〈空騒ぎ agitation〉は必要条件ではない。必要なのはそれに対応する〈空しい事物を追求する活動〉という発想である。〈気晴らし〉にせよ〈空騒ぎ〉にせよ、気晴らしの思想が発生したあとで、その思想の表現のために用意された術語かもしれないのだ。

気晴らしであれば、「半端な識者はそれをあざ笑う」（S134/L101）。気晴らしは空しい事物の追求だと知るからである。しかし本当の識者は「ある理由によって、人々は理にかなっている」と判断する。この理由とは、人間の悲惨と気晴らしの慰めにある。

より先なる着想とは、〈人々の関心事のすべては空騒ぎである〉というものだ。パスカルははじめ、アウグスティヌスの神学にしたがって、こう考えていた。〈人間はいつでも空しい事物を追求している。その結果として、神を考えることから心を逸らしている〉。しかしあとになって、モンテーニュの人間学から新たに、〈悲惨から慰める〉という一点を取り入れた。その時を境に、こう考えるようになった。〈人間はいつでも空しい事物を追求している。その目的は、悲惨を考えることから心を逸らして慰められることである〉。気晴らしの思想の発生である<sup>32)</sup>。

一口に言えばどういうことか。アウグスティヌスの神学が、モンテーニュの人間学によってあるとき一挙に変化したもの、それがパスカルの気晴らしの思想らしいのである<sup>33)</sup>。

---

32) アウグスティヌスによってすでに下地の大部分は用意されていたわけである。とはいえモンテーニュの果たした役割を過小評価してはならない。モンテーニュによってパスカルは、アウグスティヌスの祖述から脱却して、新しい思想を創出できたのである。

33) 本論はパスカル研究会第166回例会（2019年4月）において発表した原稿を改めたものである。研究会の方々のご厚意に深く感謝を申し上げる。

